

「評価規準・評価基準作成の ための参考資料」活用にあたって

元台東区立育英小学校校長

藤井 治

光村図書ホームページ「光村チャンネル」<http://www.mitsumura-tosho.co.jp> では、平成十四年十二月より、「評価規準・評価基準作成のための参考資料」を順次掲載しています。そこで、この資料の作成にご尽力いただいた藤井治先生にお話を伺いました。

無理な時間をかけずに学習活動のなかで見取るべきものを見取り、その後の指導や学習活動に生かしていく評価が望ましい。

今回、「絶対評価を加味した相対評価」から「相対評価を加味した絶対評価」へ大きく転換されました。今までも行われていた「観点別学習状況の評価」が中心ですが、それをより確かなものにするために、明確な目標を立て、一人ひとりの児童がその目標を達成しているかどうかを見取る「目標に準拠した評価」を行うことになりました。評価の新しい方針が出ると今までもそうなのですが、それに関心が集まり、先生方は「評価しなきゃ」と

すが、そこで「話し手になったときはどういうことが大事でしょう？」と問いかけ、「聞くときには何が大事でしょう。」と問いかけると子どもたちはいろいろ言ってくれます。ところが、教師がそれらをもとに三つも四つもの課題を掲げて学習するものだから、子どもたちにはめあてがつかみきれない。ですからめあては一つか二つに絞らなければだめです。そしてそれに沿って評価しなければいけません。それでも三十数人の子どもがいるわけですから、教師が見取らなければならない内容はかなりの量になるはずで、目標を絞って、具体的にすることが大切です。

**自分の学級の子どもの実態を踏まえると同時に、
個人内評価を重視したい。**

この資料では、指導書のA案を基に、その流れに沿って客観的な評価の基準を立てています。作品の特性をおさえた基準を立てていますから、指導書と違った展開の仕方をしたときは、考え方を参考にしながら、自分の基準に合わせていけばよいと思います。

大事なことは、あくまで、自分の学級の子どもの実態を踏まえながら考えていただきたいということです。基準に書いてあることと子どもの実態は、必ずしも一致していません。この資料は、あくまで教材に即した目標に準拠した評価ですから、この資料でBであっても、クラ

考えすぎてしまうようです。肝心の活動を10分も前に終わらせて、子どもたちに「振り返りカード」に◎だ○だ△だと印をつけたり言葉を書かせたりしています。さらに、それを発表させたりするのでから時間もかかるわけです。これでは「評価のための評価」になってしまっています。本当の評価はそうではなくて、学習活動や指導をしているなかで、教師が見取るものを見取ったり、あるいは子どもにも今日のめあてが何であるかを意識させてやったりして、よりそのめあてを達成する学習活動ができる、あるいは教師が必要な指導ができるために評価するというのが評価の基本である、と私は考えています。

また、評価を評定と区別する考え方がありますが、私は、この評定をも含めて評価ととらえ、指導や子どものために生かすものでなければならぬと考えます。学期の終わりに子どもがどの程度の学習状況にあって、どういうところがよくできて、どういうところが課題かということを経験に通知しながらその後の指導に生かすことが大切です。そして、次年度の担任はそれを参考に、その後の指導に生かしていくことになります。

**「目標に準拠した評価」では目標を絞って具体的に、
「話すこと・聞くこと」の研究会に行くことが多いので**

ス全体がそこまでいっていないければ、当然、そのクラスの実態をもとにしたBを据えなければなりません。

それと、もう一つ大事なことは、個人内評価を重視してほしいということです。クラスの中にはなかなかおむね達成までもいかない子どももいると思います。たとえば、五・六年生でも「根拠をもとに話す」というところまではなかなかいけません。みんなの前で話すことさえ十分にできない子どももいるわけです。そうすると、その子どもの個人内評価を大事にしていかなければいけないわけです。目標に準拠した評価だけをしていたのでは、その子どもは無視されてしまうことになってしまいます。でも、その子どもが、がんばって何とか立ち上がって今日はみんなの前で話したということになればそれを評価してあげなくてはいけません。個人内の昨日よりは今日というものを見ることが大切です。そういう評価の考え方を持たなくてははいけないということです。また、いっぽうでは非常にすぐれた子どももいると思います。教師がそんなに指導しなくても表現まできちんととらえて教材を理解できる、そういう子どもの場合は、それこそ発展的な学習を考えてあげるなどの配慮が必要になってきます。なお、Cの欄には、どう指導したらよいかという指導の手立てが書いてありますから、参考にしてください。